



最後のおくり物

ロベーンヌの夢は、有名な劇団「アルベル」の俳優になることだった。地方から一人でこの町に出てきたロベーンヌには、養成所に通う余ゆうはなく、自分なりの練習を重ねていた。ある日の夜、養成所がどのような練習をしているのかを知らうと、窓ごしに中をのぞいてみた。あまりの練習のきびしさと熱心さにおどろき、ロベーンヌは、思わず立ちすくんでしまった。

それから、たびたび夜に窓の下で熱心にメモを取るロベーンヌの姿が見られた。たまりかねて声をかけたのが、守衛のジョルジュじいさんだった。ジョルジュじいさんは、ロベーンヌの話聞き、

「本当なら許されないが、他の守衛仲間にもわたしから話しておくよ。」

と、言ってくれた。その日から、雨の日も風の日も、窓ごしに練習のようすを熱心に見入るロベーンヌの姿があった。

三ヶ月ほどたった日の朝、ロベーンヌは、アパートのドアの下に小さな紙の包みを見つけた。中には、養成所の月謝代に使ってください、という手紙とともに、何枚かのお札が入っていた。自分にこんなことをしてくれる人を、ロベーンヌは思いつかなかった。よく月も、その次の月もおくり物は届いた。

「お金をそのまま受け取ってよいものでしょうか。だれが送ってくれるのか探したんですが分からないんです。」

思いあまって、ロベール又はジョルジュじいさんに相談してみた。

「きつとあなたに期待をかけている人なんだろうね。このお金は今借りていると思えばいいじゃないか。むだにしないようにがんばることだね。」

そう言った後で、

「あっ、そうそうわたしは今度、昼間の勤め^{つと}に変わる^かことになったのでね。しばらく会えなくなるけど、くじけちゃだめだよ。」

と言って、やさしくほほえみかけた。

養成所に通い始めたロベール又は、一生けん命に練習に取り組んだ。日に日に実力を身に付け、先生や仲間からもしだいに認められるようになってきた。ロベール又は、いっそう練習に力が入った。

ところが、しばらくしてとつ然^{ぜん}おくり物が届かなくなった。次の月も、その次の月も、やはりおくり物は届かなかった。はらえない月謝^{げん}がたまり始めた。

「せっかくここまでできたのに……。」

ロベータは、思わずくちびるをかむのであった。

そんなある日の夜ふけに、とびらの外にかすかに人の気配がした。そつとげん関かんの方をのぞくと、雪明かりの中にかがみこんで何かを置いておおいている人かげが見えた。

「ジョルジュじいさん……。」

ゆっくりと起き上がったその顔が見えたとき、ロベータは息を飲んだまま、その場を動くことができなかった。ジョルジュじいさんは、立ち去ろうとしたが、そのような気がする。と思うまもなく、雪の中にたおれこんだのである。

ロベータは外へ飛び出した。かけ寄よつてみるとジョルジュじいさんは苦しそうに息をしていた。ひどい熱。ロベータは、だきかかえて自分の部屋につれて行き、ベッドにねかせると、急いで近くの病院に向かった。げん関のわ



きには、見慣れた紙の包みがあった。

「難しい状態です。大分すい弱してますから。とにかく、だれか付きそいが必要ですよ。」
医師がそう言ったとき、来ていた仲間の守衛たちが顔を曇らせた。

「体をこわして休んでいたのに、また無理して働き始めたからだろうね……。困ったなあ、このじいさんには身寄りがいないんだ。」

と、だれかが言った。

付きそいとなれば、仕事を休まなければならない。ロベーターは、しばらくうつむいていた。が、きっぱりと言った。

「ぼくが付きそいます。息子なんです。」

それからは、付きっきりで、ねむり続けるジョルジュじいさんのかん病をした。しかし、体は日に日に弱っていった。

三日目の夜、ジョルジュじいさんは、かすかにほほえみながら、ロベーターに小さな声で語りかけた。

「迷わくをかけることになって悪かったね。」

「そんな……。」

「息子だと言ってくれたんだね。」

「そんなことより、ぼくのためにこんなに苦しむことに……。」

「ちっとも苦しくはなかったよ……。幸せを感じたくらいだ。」

どこまでも気づかってくれるジョルジュじいさんの言葉に、ロベールはかたをふるわせた。

「ぼく、おじいさんに謝らなければ……。お金が届かなくなったとき、ぼくはうらみました。本当におろかでした。どんなに苦しんでいたかも知らないで。許してください。……。でも、どうして見ず知らずのぼくなんか。」

「わたしも俳優になりたかった……。きみの姿を見て……。ありがとう、がんばるんだよ……。」
ジョルジュじいさんは、そう言うと、ロベールの手をとったまま、またねむりについた。それからしばらくして静かに息を引き取った。



その夜、ロベール又はジョルジュじいさんからの最後の手紙を取り出し、もう一度読み始めた。

おぐれていたお金を入れておきます。もうすぐ、劇団の新人募集ぼしゅうの試験しけんがありますね。私は心よりあなたの努力ねがが実みることを願ねがっています。あなたの初はつぶ台たいを一日も早く観みられることを心待ちにしています。

手紙の文字がなみだでかすんだ。その中に、ジョルジュじいさんの語りかけるようなやさしい笑顔えがおがうかんできた。

ロベール又は、何かを決意したかのように、遠くに視線しせんを移うつすのだった。

(武田 正樹)

